図書館はどうみられてきたか・7

——図書館員出身作家のメンタリティ　女性作家が描く女性図書館員像——

佐　藤　毅　彦

Images of the Library (7)

——The Way of Thinking of a Writer with Library Work Experience. How have Women Writers Depicted Women Librarians?——

SATO Takehiko

Abstract : In this paper, the work of women writers Shinoda Setsuko and Moriya Akiko is analyzed through their experience of having worked in a library. The paper considers the appearance of a woman librarian as a main character in a novel, and tries to clarify one part of the thinking about the library in connection with women mystery writers. It reflects on the depiction of the special features of library work through the experience of the writer who has worked in a library.

要旨：今回は，図書館に勤務した経験のある，女性作家の篠田節子，森谷明子，をとりあげ，その作品に，主要なキャラクタとして女性図書館員を登場させているケースについて分析した。そのことで，こうした作家の図書館に対するみかたの一端を明らかにしたいと考えた。自ら勤務していた図書館でのさまざまな体験が，図書館業務の専門性や，社会の中での図書館の存在についての描写のしかたに，生かされている。

1. はじめに

文芸作品の紹介記事や数多くの小説・エッセイなどが連載されている，総合文芸雑誌『ダ・ヴィンチ』(メディアファクトリー)[1]2005年8月号に，特集「好きな本に囲まれて仕事したい！　図書館ではたらく。」[2]が掲載されている。特集の冒頭ページ（p. 197）では，一日図書館員体験をする中学生モデルの女性が，書架の前で数冊の本を抱えている写真の下に，以前の図書館で貸出管理のために使用されていた「図書カード」が映り込み，そこには，この特集内の目次が，カードの記入欄を使って表示されている。

「図書館の仕事って？　中学生モデルのhanae*ちゃんが図書館の仕事を体験」（pp. 198–199）では，実際に図書館で撮影した写真とキャプションで，業務体験の内容が紹介されている。撮影に協力しているのは，上野にある「国立国会図書館国際子ども図書館」である。「お客さんから質問が……」という場面では「質問に答える“レファレンス”は，重要な仕事。聞き漏らしがないようにメモを取ること，コレ，図書館員の基本です」と説明されている。また「本を貸し出す」場面もあるが，実際に「国際子ども図書館」では，利用者個人に対して直接貸出することは，業務として行なわれてはいない。「目録カード」を見ている写真もあるが，その説明には「今ではパソコン検索システムが整備されていることが多いので，目録カードを見ることは少ないそう」とある。

モデルとなった女性は，「hanae* 1991年アメリカ生まれ。6歳のとき日本に戻り，10歳よりモデルとして活動」「映画・ドラマ・CFにも多数出演のスーパー中学生」と紹介されている。体験を終えた感想として

「想像以上に体力を使う仕事でびっくり！　館内はゆったりしていますが，働いている方はテキパキ動いてるんですね」「小さいときには，母に連れられてアメリカの大学の図書館によく行ったそうなのですが，その記憶はあんまりなくて，だから，日本に帰ってきてから，母とよく出掛けた近所の図書館が，最初の思い出」「図書館って流れる空気もゆったりしているし，本に夢中になっていても誰にも叱られない。私にとって，温かみのある，落ち着く場所です」と述べている。

「本に囲まれてはたらく人たち」（pp. 200–201）では，「本を愛して図書館司書に『都立日比谷図書館』米長純子さんの場合」，「子どもたちに本を届けたい『（財）東京子ども図書館』清水千秋さんの場合」という，ふたりの女性に対するインタビューをまとめたものが掲載されている（この他に，書店関係者としてふたりの男性に対するインタビューも，あわせて掲載されている）。

米長さんは「『小さいときから本が大好き』『図書館にも通っていましたよ。家の近くまで分館が出張してきてくれるんですが，それだけじゃ間に合わなくて別の図書館にも行き来したりして』」いたという。その後，図書館情報大学に進み，東京都の図書館司書に採用され，都立の定時制高校，都立中央図書館を経て，現在の日比谷図書館に勤務している。「『より多くの方に本の面白さに触れていただきたい，だからこそ気軽に声をかけてもらえるような環境づくりが必要なのかもしれませんね』」と述べている。

清水さんは「『小さい頃，公共図書館が近くになかったので，代わりに町内会館の図書室を利用して』」いて，そこにいた年配の女性と接点があったという。大学時代の教育実習先では「『図書室は，いつも鍵がかかっていて，まるで倉庫のよう。先生の許可がないと入れませんでした』」という。そうした状況を変えたいと思い，司書資格を大学卒業後に取得した。大学図書館に勤務した後，「東京子ども図書館」の職員募集に応募して採用された。「人からはよく『図書館員って楽そうでいいね』と言われるそう。でも実際は，カウンター業務はもちろん，本選びや展示物の制作など，仕事はいつも山のようにある」「『子どもたちと本の楽しさを共有できること。それが充実感に繋がっている』」と述べている。

「こんなところではたらきたい！　気持ちのいい図書館・ブックカフェガイド」（p. 202）では，「国際子ども図書館　建物もステキな児童書専門図書館」「日仏会館図書室　訪れれば誰でも一日フランス気分!?」「日本近代文学館　ブンガクに触れて，楽しめて，勉強できる！」「（財）国際文化会館図書室　作家も利用する会員制の専門図書館」（他にブックカフェが2箇所）などが紹介されている。

「本好きのためのハローワーク」（p. 203）のページでは，「図書館員になる」「書店員になる」「本屋さんになる」「古本屋さんになる」として，それぞれについて，参考になる文献や，ホームページのアドレス（これは図書館員に関してのみ）が掲載されている。

「図書館員になる」という部分では，「ここで図書館職員の求人情報を探そう」として「有資格者の正規職員と臨時職員を中心に紹介」には，「日本図書館協会ホームページ」のアドレスと，「日本図書館協会発行の月刊誌『図書館雑誌』「こくばん」欄」をあげ，「司書資格の必要のない求人や派遣，業務委託，短期アルバイトまで網羅」では，「われわれの館」「WEB版図書館就職相談室」「リクルートスタッフィング」のアドレスを紹介している。さらに，森智彦『司書・司書教諭になるには』ペリカン社[3]，常世田良『浦安図書館にできること』勁草書房[4]，の2冊について，表紙と，内容の簡単な要約が掲載されている。ここでは，司書資格取得について「司書の資格を取得しても」「司書職に就きたい場合は，公務員試験や国家公務員試験などをパスしなくてはなりません。残念ながら司書職の採用は少なく，競争率も非常に高いのが現状です」と説明されている。さらに「臨時や派遣，業務委託であれば採用枠もぐっと広がります。しかも，司書の資格はあったほうが有利にしろ，“なくても可”という条件の図書館もたくさんあります」として，上記のサイトをチェックすることをすすめている。

この部分は現実の「司書」資格扱われ方や，職員配置の実情などについて，一定の事実に基づいた情報を提供しているが，占めているスペースの分量は，1ページの5分の2程度であり，特集全体が7ページあるので，その5パーセント程度に過ぎない。このページの残りの部分は，「書店員になる」「本屋さんをひらく」「古本屋さんをひらく」というタイトルのもとに，それぞれの職種に関連した書籍が2冊ずつ紹介されている。

こうした企画が掲載されること自体，「図書館ではたらく」ことについて，読者の間に一定の関心が存在すると，編集部が考えていることを物語っている。そして，一日図書館員を体験するのは女性，図書館に勤務しインタビューの対象として選ばれているのもふた

りの女性であることは，図書館が女性にとっての「はたらきたい」職場のひとつであるとイメージされていることを示しているといえよう。

一日図書館員体験の写真撮影が行なわれたのは，「国際子ども図書館」であり，職員の代表としてインタビューを受けている女性の職場は，「都立日比谷図書館」「(財) 東京子ども図書館」で，いずれも専門的な色彩の強い図書館である。東京都内に限っても，数としては，23区の区立図書館が200館あまり，多摩地区にも，市立図書館は分館を含めると150館あまり，存在している。住民が「誰でも」「無料で」利用できる，身近な存在の図書館は，撮影の場所としては選択されず，そうした図書館の職員はインタビューにとりあげられていない。これには，撮影の便宜の問題や，区・市立図書館には，勤務経験の豊富な，専門職の規職員が少ないなどの事情も影響していると考えられるが，それとともに，読者が考える図書館や図書館員についての好感のもてるイメージと，区・市立図書館の実態とが，必ずしも一致しているとは限らないという事実が存在している，といえるのではないか。

「こんなところではたらきたい！　気持ちのいい図書館」のページ（p. 202）で紹介されている（「国際子ども図書館」「日仏会館図書室」「日本近代文学館」「(財) 国際文化会館図書室」）のは，いずれも「専門図書館」であり，利用者は限定される。限定され，知的に洗練された利用者がやってくる図書館のイメージこそが，この雑誌の読者が「はたらきたい」と考えている図書館なのだと，編集部が考えているように思われる。現実には区・市立図書館には，分館だけでなく，中央図書館であっても，現在は多様な人々が利用者として訪れており，トラブルが発生しているケースもある[5]。

一方では，実際に，正規の職員として，公立の図書館へ就職するのは，かなり困難になっているし，専門図書館では，募集そのものがごくまれにしか存在しないという状況である。もちろん，この特集でも，その事実関係について解説されてはるが，記事の分量としては特集記事全体のごく一部（全体のページ数の5パーセント程度）にすぎない。先に示したようにきびしい現実の部分には，かるくふれる程度で済ませているところに，この特集の特徴のひとつがあらわれている。

「図書館はどうみられてきたか」という，この一連の論考で，一昨年，昨年と，雑誌『図書館の学校』に掲載されたエッセイにみられる，文芸関係者の図書館観をとりあげてきた。文芸作品やその紹介記事を数多く掲載している雑誌『ダ・ヴィンチ』に「図書館ではたらく」ことが特集でとりあげられ，特に女性が働く場としての「図書館」が紹介されていることは，女性読者の意識の中で図書館や図書館員が，文芸関係の周辺に存在していると編集部が考えているという見方もできよう。現実に，図書館員から文芸書の著者になっているケースも男女を問わず存在する。

よく知られているところでは，国立国会図書館勤務経験のある阿刀田高，八王子市の職員として図書館や福祉関係の仕事を担当していた篠田節子，などのケースがある。今年（2005年），『れんげ野原のまんなかで』（東京創元社）を刊行した，森谷明子も横浜市図書館に勤務していた経験がある。今回は，女性作家の篠田，森谷両氏をとりあげ，その作品に，主要なキャラクタとして女性図書館員を登場させているケースについて，その描かれ方を分析することで，図書館員出身作家の図書館に対するみかたの一端を明らかにしたいと考えた。

2.「観覧車」（『秋の花火』収録）

2–1. 篠田節子と「観覧車」について

篠田節子は，1955年東京都生まれ。東京学芸大学卒業後，八王子市役所に勤務。『絹の変容』により「第3回小説すばる新人賞」を受賞した後，作家活動に専念。『ゴサインタン　神の座』で「第10回山本周五郎賞」，『女たちのジハード』で「第117回直木賞」を受賞し，現在まで，長編・短編あわせて小説を数十点，エッセイ・紀行など数点を刊行してきている[1]。

作家に対するインタビューのビデオソフトシリーズの中では，小さい頃の思い出として，夏休みに，泳いで帰ってきたあと「図書館へ行って，本を借りてくるわけです。プールに行って，帰ってきて，昼寝しながら，ねっころがって，本を読むというのが，小学校の頃の楽しみでした」と述べている。また，児童文学の作品として，『失われた世界』や『沈黙の世界』『海底二万マイル』『コンティキ号漂流記』を紹介し，最近，書店の児童書コーナーにあるのは，ほとんど参考書か，小さい子むけの絵本で，小学校四・五年生が読むような活字の文学は少ないが，「夏休み，なかなか，本屋さんにはありませんけど，図書館にはあります。せひ，ご一読ください」[2]とまとめている。

篠田節子は，作家専業として活動する以前に，八王

子市役所に勤務した経験があり，図書館に配属されていた期間がある。とあるエッセイには「あるドラマできれいなお嬢さんが，図書館員と称してカウンターに座っていたそうだが，あれはウソである。ニットのスーツ姿でにっこりしているのは，たいていアルバイトで，本物の図書館員は，トレーナーにズボン，その上によれよれのエプロンをかけ，本を運んでいるか，騒ぐ子供を怒鳴っているか，黙々と新聞を綴じるかしている。つまり，肉体労働者である」「私も図書館勤務を始めてから体型が変わった。そうならぬ者は，たいてい，頸腕症候群や膝関節症を起こして異動させられていく」[3]と述べられている。また，最近の雑誌に掲載された，宮部みゆきとの対談で「物静かで本が好きな人なんか，図書館員になるわけないって。もろ，あれ，対人関係の仕事なの。力仕事ありの接客業。だからドラマで図書館員が清楚なスーツ姿で出てくるのを見ると，ばかやっちゃいかんよ，エプロンに決まってるだろう。段ボール担ぐわけだから。って突っ込み入れたくなる」[4]と発言している。図書館職員について，外部からの表面的な見方を否定し，実体験に基づいた図書館職員の業務について紹介しているといえよう。

もっとも，図書館をふくめて，八王子市役所への就職は，必ずしも本人が当初から意図していたものではなかった。学生時代のこととして，「『あなたも十二時間で英文タイプが打てる』そんなキャッチコピーに引かれて，銀座にある教室に通ったのは，二十歳の春のことだった」「八王子の奥にある我が家から銀座までは，バスと電車を乗り継ぎ片道二時間半かかる。それなら，と茗荷谷にあるわが大学の寮に泊り込むことにした」「落第続きで進級できないまま，銀座通いも，寮暮らしも思いの他長くなった。教室以外の時間はやることもないので，人事院のアルバイトを始めた」「午前中いっぱいアルバイトをしてタイプの教室へ，それが終わると図書館を経て寮へ戻る」「規則正しい生活は春休みいっぱい続いた」その間「友達と会ったり，デートをした記憶はない」「春とは思えない寒さだった。何より孤独だった」[5]という生活を送っていたことが回顧されている。

同じ時期について「大学三年から四年の夏にかけて，私は厳しい一年を送った。裁判所の調査官になりたくて，そのための受験勉強に明け暮れた」「大学のカリキュラムの関係や当時の就職状況からして逆風が吹いているような状態で試験に臨んだことは確かだ」「真夏，冷房のない会場で行なわれた採用試験は四時間に及び，終わって戻ってきた後，熱を出して，二，三日寝込んだ。そして一年の全力疾走の結果は完敗だった」と述べられているように，裁判所の調査官を志望していたが，果たせずに終わっている。「失意のまま役所に入ったが，士気は上がらず，英語その他の資格に挑戦しても，中途で挫折。結婚した後は子宮内膜症を抱え込み，挙げ句に不妊という，あまり冴えない二十代を送ることになる」[6]という経過をたどったことが語られている。

その後，「市役所に入って，最初に配属された職場は，福祉事務所だった」「配属先は庶務係で，入ったばかりの私の仕事は，文書の受け付けや伝票整理，統計記録の集計などだったのだが，いつかはケースワーカーに，という夢があった」「金をもらうための仕事は，たいていつまらないものだ。自分の生活を支えられるくらいの給料をもらえる仕事は，さらにつまらない」「社会環境が変わったとき，有能，無能，人格の良し悪しの評価基準など，いとも簡単に変わってしまう」[7]と感じていた。

こうした，市役所での勤務体験が，後に小説執筆に生かされることになった点については，いくつかのインタビューで言及している。

たとえば，「『役所からすると困った職員だったと思うんですね（笑）。ただペーパーテストに強いだけで役所に入った人間で，仕事に関してはほとんどやる気がない。かといって，無断欠勤とか，横領みたいな悪いことはしないので，クビにはできない』」「『本人も，役所内でキャリアを積んで出世してという気が最初からない』」「朝日カルチャーセンターの小説実践講座」を「『文章を書けるようになれば』」「『多少なりとも役に立つことができるかなぐらいの気持ちで受けたら，たまたまそれで芽が出たんです』」[8]と語っている。

また「うつうつとした日々に巡り会ったのが小説講座の先生の一言『この人，いけるんじゃない』。その時から，『作家になる』という“野心”を抱いた。しかし，その役所勤めも作家としての財産になった。福祉事務所，教育委員会，図書館，保健センターなど市民と係わりの深い部分での経験は，『世の中の人のものの見方のようなものが身についた。作家志望の人は役所に勤めなさい，とアドバイスしたいほど』」[9]と述べている。

「ペーパーテストに強いだけ」「たまたまそれで芽が出た」など，かなり謙遜が含まれた表現になっているが，不本意な思いで勤めた市役所ではあったが，そこでは多様な体験をし，それが作家活動にも役に立っていること，また，苦しい状況の中でも文章修行を継続

することで，小説家となっていったことが述べられている。

篠田節子は作品の中で図書館を利用する人物をひんぱんに登場させている。この作者の図書館利用者に対する考え方などが表されているこれらの作品については，別の機会にあらためて論じることとしたい[10]。多数の作品の中で，図書館に勤めている女性が主要なキャラクタとなっているものに，「観覧車」（『秋の花火』収録）[11]がある。

2–2．女性図書館員の外見的特徴

この小説は，「梅沢」という男性の視点ですすめられていくが[1]，後に図書館に勤務する30代の女性であることが判明する人物について，最初は，どういう背景をもっているかは明らかにされないでストーリーがはじまる。「紺のスポーツバッグを持ったセーラー服の少女が立っている」「ひどく痩せていて背丈も梅沢の胸くらいしかない。重たげなバッグが痛々しい」（p. 15）「セーラー服の白襟が二本，闇の中で燐光を放っているように鮮やかだ。紺のスカート丈はそれほど短くないが，足首はルーズソックスだ」（p. 16）という描写になっている。この女性については「梅沢」の目から見た違和感も表明され「ルーズソックスの下に，肌色のストッキングをはいているのだ。いくら寒いとはいっても，ルーズソックスにはナマ足が原則だ。ファッションルールに厳格なこの年代の少女にしては妙だ」（p. 18）「支柱についたライトが少女の横顔を一瞬，照らした。ずいぶん大人びた印象がある。化粧気のない皮膚は荒れて，粉が吹いたような状態だ。病気なのか，といぶかりながら，視線を手元に落とすと，その手も顔と同様に荒れて，しかも筋ばっている」（p. 20）と，感じている。

そして，女性がもっていたポケットベルの表示に「『H市図書館・星が丘分館　備品276号』シールにはそう表示してあった」（pp. 28–29）とあり，女性の財布に「金とカード類があった」ことについて，「妙な感じがした。プリクラのシールやファンシーショップの割引券といった，少女のもっていそうなものはない。代わりに銀行のキャッシュカード，図書館の貸出券，病院の診察券と，写真入の身分証明書があった。身分証明書であって，学生証ではない」（p. 30）ことに気がつく。その身分証明書の写真は「耳の下くらいでカットされた髪，化粧気もなく，印象の薄い，はかなげな顔。しかし『青木佐知子』という名前のその人は，“少女”ではなかった。『H市立図書館星が丘分館』というのが，彼女の勤め先だ。名前の横に肩書きがついていた。『資料第一係長』と」「生年月日を確認する。昭和三十六年生まれ。三十五歳だ」（p. 31）とここでプロフィールが明らかにされる。

「『私，自分のこと，一言も高校生だなんて，言ってないけど……』抑揚のない口調で佐知子という図書館の係長は言い訳をするともなく言った」（p. 31）制服は自分のものだというが「一目でおばさんとは判別のつかない，かすみ草のドライフラワーのような，枯れてなお可憐で痛々しいような容姿をセーラー服に包んだ，そのあざとさが許しがたい」（p. 32）と「梅沢」には感じられたことになっている。

2–3．女性図書館員の性格・行動分析

この女性は「『私，人に嫌われる性格なの』」（p. 41）と自分をきめつけ「『私が図書館員になったのは，民間企業の面接で軒並み断られたからなの。まじめそうだけど，暗い感じがするって言われて。図書館員なら公務員だから，試験でなれるの。面接なんか形式的なものだから，まわりの人を暗い，いやな気持ちにさせる私のような人間だって落とされることはないわ』」（p. 43）「『学生の頃はね，試験前になると急に友達が増えるの。私のノートをコピーするために。でも，試験の打ち上げコンパには誰も誘ってくれなかった』」（p. 44）と語っている。

また，職場での人間関係について「『司書の女の子が，庶務担当の男性と結婚する』」ことになったが，その人は「『新卒で図書館に入ってきて，私のセクションに配属された子だったの。気立てが良くて，頭が良くて，いい子だった。私は面倒を見たつもり。資料の取り扱いから始まって，予算書の見方まで。勉強してもらって，優秀な司書に育って欲しかったから，研修も，出張も，彼女をできるかぎり充てた。カリフォルニアの図書館の視察の話も，私に来たのを，若い人にチャンスを与えたほうがいいから，と彼女に譲ったの。彼女が予算残高を間違えて，一桁違う数字を提出してしまったときにも，かばったわ。でも，彼女が結婚するということを，正式な届けを出されるまで知らなかったのは，私一人だった』」という事件があった。「『結婚はプライベートなことだから，プライベートでもつき合える人だけを呼びたいんです』」との理由だったが，「『顔を立てるためにだけ，結婚式に呼ばれるなんて私だって耐えられない。問題は私が，私生活では関わりあいたくない人間だったってことなの』」（pp. 49–50）と感じて，その結婚式の日，六月

初めの日曜に，夏物と冬物の入れ替えをしていると，セーラー服がでてきて，そのかっこうのまま，夜十一時過ぎ，コンビニへ行き，声をかけてきた男性と「『その晩，初めてホテルに入ったんだけど，こんなに優しくしてくれるのかと思って……』」（p. 51）「『一時だけでもいいの。何もかも嘘なのよ，でもそうしなくてはいられない』」（p. 52）と感じたことが語られている。

この部分は，篠田節子自身が，「ただペーパーテストに強いだけで役所に入った人間」[1]であるとインタビューに答えたり，学生時代の一時期，人事院で「午前中いっぱいアルバイトをしてタイプの教室へ，それが終わると図書館を経て寮へ戻る」「規則正しい生活は春休みいっぱい続いた」その間「友達と会ったり，デートをした記憶はない」「春とは思えない寒さだった。何より孤独だった」[2]という生活を送っていたことと，完全に一致するものではないにしろ，ある程度共通する方向性を見出すことができる。

2–4. 職業としての図書館員と「東電OL事件」への意識

小説自体が長編ではなく[1]，内容的に女性の職業がクローズアップされるようなストーリーにはなっていないということもあり，女性が図書館員であることやその仕事の専門性についての言及はあまりみられない。「梅沢」との会話の中に「『図書館の係長さんだもんな。公務員だから給料いいよね』『世間で言われているほどでは……』」（p. 40）という場面があること，「『カリフォルニアの図書館の視察の話も，私に来たのを，若い人にチャンスを与えたほうがいいから，と彼女に譲ったの』」（pp. 49–50）といった記述が目立つくらいである。

正規の職についている30代の女性が売春行為に及ぶ，という点で，この小説の枠組みは，いわゆる「東電OL事件」を想起させるものとなっている。この事件については多数の出版物が刊行されているが，たとえば，佐野真一は「『東電OL殺人事件』が起きたとき，世間は『発情』といってもいいほどの過剰な反応を示した。昼は美人エリートOL，夜は売春婦。マスコミは」「昼と夜の二つの顔の落差に照準をあてたストーリーづくりに狂奔していった」[2]と指摘している。

また，自らもさまざまな状況を体験し，それを著作として発表してきている，中村うさぎは，「東電OL」について「『社会的自己実現』と『女としての自己実現』の間で引き裂かれたキャリアウーマンの悲劇」[3]「何故，彼女は『売春』にこだわったのか？」「私は，彼女の売春を『嗜癖』として捉えている。彼女は摂食障害の気があったようだし，おそらく『嗜癖』にハマりやすいタイプと思われる。嗜癖の人は強迫神経症的な反復行為に耽溺しやすいのだ」[4]と，自らの「買い物依存症」体験をも考慮にいれつつ検証している。

この事件をモチーフにした小説もいくつか発表されているが，たとえば，桐野夏生の長編小説『グロテスク』では，女性の設定を「父親の勤めていたG建設株式会社」に勤務しており，その会社は「業界最大手で，『G家族主義』という言葉が生まれるほど社員の結束が固い」。そこで「女子総合職の先駆け」として「総合研究所調査室」の「副室長」をしていた，「拒食症」の受診歴がある（pp. 265–266）女性[5]としている。

篠田節子の「観覧車」[6]でも，30代の安定した正規の職業についている女性が，売春を行なっていたという点で，この事件を意識したと思われる設定になっている。実際の事件の被害者となった女性は，公的性格の強い企業である「電力会社」に勤務しているという境遇であったが，「観覧車」では女性を「公務員」で，勤務先は「図書館」に設定している。篠田節子は，自身が八王子市役所で「福祉事務所，教育委員会，図書館，保健センターなど市民と係わりの深い」[7]さまざまな部署を体験したことをインタビューで答えているが，この事件をモチーフにした創作を考えた際に，登場人物の女性が勤務する職場として，「市役所」の一部署である「図書館」を選択しているということになる。

3.『れんげ野原のまんなかで』

3–1. 森谷明子と『れんげ野原のまんなかで』について

『れんげ野原のまんなかで』[1]は，2005年2月に刊行された。自著について，作者の森谷明子は「『アメリカのミステリ作家アーロン・エルキンズの美術館学芸員シリーズ[2]に触発されました』」[3]と述べている。この『れんげ野原のまんなかで』については「ささやかではあるけれども不可解な出来事が次々に発生する」「ミステリとしての面白さと同時に，女性心理の細やかな描写も読み応え十分の秀作だ」[4]と紹介され，また月刊の書評誌『本の雑誌』でも，「加納朋子と宮部みゆきを足して2で割って，作者オリジナルのマフラーでくるんだような作品で，ミステリ的にはちょっと甘

い部分はあるものの，図書館好き，本好きには嬉しくなるような連作ミステリ」[5]と評されている。図書館関係の広報誌でも，この作品を「図書館をよりよくしていきたいという司書の思いが根底にある」「来館される利用者の方が満足して過ごしていただけるよう，本の整理はもちろん，本にまつわる相談，来館者の皆様の個人情報の管理など」「一人でも多くの利用者が，求める本に出会えるべく，迷い，奔走し，学んでゆく図書館司書」[6]の本として，紹介しているケースがある。

作者である，森谷明子については，自身でも「『大学を卒業してから十五年以上も図書館に勤めておりました』」[7]と述べているが，著書の紹介記事に掲載されている略歴では「1961年，神奈川県生まれ。横浜市立図書館勤務を経て，紫式部を探偵役にした『千年の黙　異本源氏物語』（東京創元社，2003）[8]で第13回鮎川哲也章受賞」[9]とされている。

3-2. 図書館の情景描写

冒頭で紹介される図書館の状況は，次のようなものである。「文子はカウンターから体を離して，この一時間内で六回目のあくびをかみころした」「なにしろ，暇なのだ」「ここは色気も洒落気も無用の場所だから。ここは図書館である」（p. 7）その利用者が少ない理由の一つとして，図書館の立地について「どうして文化の殿堂たる図書館がススキばかりがおいしげる斜面のど真ん中にあるのか」「なんだって，こんな人気もないところに図書館など，建てたのだ？」「人口密度の低い北部地区にも公立図書館は必須」（p. 8）ではあるが，分館計画が，日本経済のバブル崩壊により，自動車メーカーの撤退などがあり，新年度財政は一気に三十パーセント削減され「緊急時にどこを切り詰めるか」となって，「北部分館の用地買収費は計画半ばにして，雲散霧消，ゼロになってしまった」「図書館？　財政ピンチだというのに，そんなのんきなものに大事な税金を使っている場合か！」（p. 9）となった。しかし，土地の寄付を，「秋葉のだんな」（p. 9）といわれる古くからの地主が申し入れ「図書館増設を公約にしてきた現市長としても計画棚上げは望むところではなく」「忽然と，文化の殿堂秋庭市立秋葉図書館は現れたのだ」（p. 10）という。こうした図書館の立地決定に至る内部事情については，外部からは知ることのできない，図書館の実体験がある程度反映されているといえよう。

図書館の施設としては「中庭にプレハブの倉庫がある。財政厳しい図書館に似つかわしく，ある学校で廃棄処分にしたものを貰い受けてきたものだ。発行から年数のたった新聞や雑誌など，図書館にとっては大事な，だが場所を取る資料の保管に使っている」（p. 33）「秋葉図書館にはブックディテクションはない」「玄関ドアについている機械はただの入館者数の計測器だ。無断持ち出し禁止のためのディテクションを設置したいのは山々だが，そのシステムは秋葉図書館一年分の図書購入費より高額な費用がかかる」（p. 132）「図書館には宿命的について回るものがいくつかある。その一つが埃だ」「弱い気管支を持つ者に，店ざらしの書物六万冊（開架部分のみ）に囲まれた空間は，よい環境とはとてもいえない」（p. 192）などの描写は，外部から見ているだけでは，分かりにくい部分で，実際に図書館で勤務した経験が，小説に生かされている部分である。

図書館の開館時間と，職員の勤務体制については「市職員の標準の勤務は午後五時で終わるが，平日は午後七時まで開館している図書館では，以降の時間も交代で残業する」（p. 15）「午前九時。秋葉図書館の開館時刻である」（p. 55）[1]となっており，職員の勤務体制と図書館の開館時間は一致していないことについて，ふれられている。

開館については，「公共機関は休むわけにはいかないのだ」「市の条例で定められている開館時間は，遵守されなければならない」（p. 143）とされており，二月末の日曜，大雪のため交通機関にも影響が出るが「不可抗力によりやむなく閉館する場合も，中の図書館員の裁量では決められない。所属長の決済がいる。最終決断者の秋庭市長の決断」（p. 146）を待っている。

市内からの来館者の足として「市長が音頭を執った市内循環福祉バス」が「市役所を起点に，公民館，保健所その他の公共機関つごう八箇所を回り，料金は一律百円」で「定員十二名の小型マイクロバス」が巡回するようになった。「シルバーシートを利用するような方々には好評」で「その停留所の一つに秋葉図書館が入っている」。2ヶ月で効果があらわれ，「利用者数」が「二十パーセントアップ」（pp. 60–61）しているという部分などは，実際に最近の地方の自治体でもよくみられるケースである。

また，隣の市の図書館から貸出依頼をうける場面があり「『おたくの図書館なら，誰も借り手がいないから，絶対書架にあるはず』」と言われる。この状況については「図書館は自館の書架にない資料を利用者に

求められた場合，協定を結んでいる他都市の図書館に助けを求める」と説明され「『本を持っている』ことよりも『本を貸している』ことこそが末端図書館のレゾンデートルである以上，秋葉図書館が周辺図書館からこぞって頼られている現状には，かなりなさけないものがある」（p. 12）と指摘されている。この本は，ビジネス書で「経済誌の書評欄などでじわじわと評価が高まってきている翻訳物」であるが，「『いい本です』秋葉図書館の最古参の女性司書，日野のツルの一声で所蔵を決定」したものの，「六ヶ月間棚の肥やしにしかなっていなかった」「この手の書物は目端のきく他市」「のビジネスマンに横取りされる」（pp. 12–13）電話をかけてきた図書館員は「『ああ，よかった，やっぱりおたくならありましたか』」（p. 14）と感想をもらしている。この例のように，ある図書館で所蔵していない資料について，図書館相互の間で融通しあっている，ということも，実態をふまえて，ストーリーに取り入れられている。

3–3. 図書館の職員

この小説には，図書館が描かれている他の作品とくらべても，多様な雇用形態の様々な資格をもった職員が登場しているところが，特徴のひとつとなっている。それぞれの発言や行動をもとに，その特性を考察する。

○（今居）文子

ストーリー全体は，読者がもっとも感情移入しやすいと思われる，20代の女性職員「（今居）文子」の視点で語りすすめられていく。

「この図書館に配属されて七ヶ月，先輩の司書二人から，新人教育という名のもとに，どれだけの本を読まされ，どれだけの人の話を聴講に行かされたことか。社会人となり，晴れて一人暮らしを始めた文子の狭いアパートには読まねばならぬ本が山積みだ。大学時代とは比較にならない読書量を要求されている」（p. 14）とあり，彼女は「アルバイトの大学生」とは「三歳の年の差しかない」（pp. 142–143），まだ経験の浅い女性図書館員であるが，一方で「文子は彼の上司である」（p. 143）とあるように一定の責任の所在を自覚している。

図書館の登録者一覧と思われる紙片が図書館に持ち込まれた場面では「『図書館で仕事する者にとっては，お客様の個人情報をみだりに他人の目に触れさせるなんて，まず，理屈じゃなしに本能のレベルでストッパーがかかるものなんです』」（p. 111）と発言しており，「図書館の自由」や「利用者のプライバシーに対する配慮」について，原則的な知識をもっており，それに基づいて行動しようとしている。

「資料の問い合わせと称して無体な電話をかけてきた利用者への応対に，苦労している」部分では「図書館員は，お客様の要求には最大限の敬意を払うべきである」と考えて対応してはいるが，アルバイトの対応が気になり「検索の初手から不手際をさらけだしては，お客様に大変な不信感を抱かせてしまう」（pp. 56–57）と思って，そちらに対応しようとすると，他の男性利用者で，図書館学の担当教員を退官した人物が直接利用者にアドバイスしてしまうというストーリーになっている。

「図書館員は書棚を熟知している。書架から消えれば――つまり，誰かが借りていけば――すぐにわかる」（p. 51）という部分では，職員の資料利用状況に対する感度の鋭さが示されている。この点については，別のところでも，「図書館の商売物は一にも二にも本である。であるから図書館員は常に，本の状態を良好に保つべく気を配る」（p. 200）という表現がとられている。

利用者とのコミュニケーションについては，「図書館員はカウンターにいるべきである。余裕のある図書館ならば，フロア係よろしくお困りのお客様がいないかどうか，常に館内を巡回すべし，という理想論はある。だがそれはあくまでも理想だ」（p. 68）と，理想と現実に可能な対応を分けて考えている。

一方，図書館にやってきた，ある人物が，昔読んだ小説について「書いた人も題名も覚えていない」けれど，そのヒロインの様子を描写した部分の一部を聞いて「書棚へ駆け出し，すぐに一冊の本を持って」やってくる場面がある。そして「『すごいわ，あたしが何十年も見つけられなかったのに。ありがとうございます。』これこそ図書館員の至福の瞬間である」（p. 229）と感じており，利用者の質問に対して誠実に取り組もうとする意欲と，一定の実践力を所持していることがわかる。

また，巡回バスによって，高齢の利用者も図書館を利用しやすくなったことについては「図書館利用者の平均年齢とともに，滞在時間も増加しているような気がする。まあ，いい。どの方も大切なお客様だ」（p. 65）と感じている。

○日野

年齢的には，作者に近い存在だと思われるのが，女性職員の日野である。「日野は当県の名を冠する国立

大学の出身」「理学部卒，司書課程修了という経歴」で「理数系の司書というのも珍しくはない」が「県内中の図書館からここぞという時に頼りにされているのはその専門知識のせいだけではない。語学力である」(p. 58) という人物である。

日野は，新聞の所蔵状況について「『十五年以上前ならうちにはないわよ。開館以来の新聞しか保存してないから。地方紙レベルの記事だと，縮刷版やオンラインのデータベースでも無理だもの』」「『本館へ行きなさい』」「『本紙が四十年分保存してあるから』」(p. 206) と発言するなど，この図書館の資料所蔵の状況や，よりくわしく調べるために必要な情報源についても，即答できる知識と経験を備えている。

小説全体を通じて，図書館での資料選択については，この人物の発言機会がもっとも多い。あるビジネス書について，「『いい本です』秋葉図書館の最古参の女性司書，日野のツルの一声で所蔵を決定」(p. 12) したというエピソードもある。後輩の女性職員である文子は「『日野さんてね，本を推薦する時に，あっさりとこう言うんです。『いい本です』って。そうして，『日野さんがそう言うからには，それは本当によくできた本なんですよ。ジャンルを問わず』」(p. 221) と考えている。資料選定の際に，自信をもって推薦しているのは，それが可能なだけの知識や経験を有しているということになるが，一方で，その根拠が具体的に語られず，「いい本です」とだけ言われているのは，やや分かりにくい部分である。

一方，男性職員の「能勢と日野は採用試験以来の同期生だ」(p. 64) ということで，能勢が購入を求めた四万円の『南方熊楠全集』，について，日野が「『却下』」「『そこまでの本格的な資料は秋葉レベルで持つことはない』」「『原資料より先に』」「『皆さんの関心を広げさせる資料から充実させていくべき』」(p. 106) と，こちらの方では，やや具体的に選択の判断の根拠が示されている。

また，図書館での資料選択について，秋葉市に書店は六軒あるが「『どこも似たり寄ったり，文庫本と雑誌だけでスペースの大半は占められているようなお店ばかり。話題の新刊書も，一週間たったら返品されてしまう』」「『図書館は，違う。本を手放さない。売れようが売れまいが，わたしたちはそんなことを基準に選ばない。選ぶ基準はただ一つ，うちの図書館にふさわしい出来かどうか，それだけ。だから結果的に，ここには書店よりずっと高価な本が，ずっと豊富にそろっている』」(p. 118)「『あなたは代理なの。具体的に言えば，秋庭市民八万人の代理として，本を受け入れていくの。秋庭市民から預かったお金を使ってね。だからたった一冊の本についても，なぜこの本を買ったのか，または買わなかったのか，いつ何時説明を求められるか分からない。そしてその時にはあなたは合理的な説明をして，図書館の判断を納得してもらわなくてはならない』」(p. 119) と，後輩の文子に向かって語っている場面もある。ここでは，書店という出版物の流通機構と，図書館での資料選択のもつ意味合いの違い，さらに図書館員がその判断について市民に対して説明責任を負っているということが，後輩へのアドバイスの中に具体的に語られている。

こうしてみると，選書に関しては，やや利用者の要求にこたえることに消極的な考え方であるともとれるが，先に示したように『南方熊楠全集』など，多くの利用が見込めない高額資料の購入には，具体的に理由をあげて反対しており，福祉バスの運行で利用者が増加したことについて「『とにかく結構なことよ，使ってもらってこその図書館ですからね』」「『図書館に，わざわざエネルギー使って来ようなんていうのはよほど限られた人間ですよ。決定的に立地条件が悪いんだから，少しでも人を引き寄せることはやらなくては』」(p. 61) とも述べており，図書館が利用されることの重要性を指摘している。

他に，日野は，「ケーブルにからまったままコンセントを握りしめている子どもを見て，悲鳴をあげた。子どもではなく，端末機の心配をして」(p. 18) という場面や，恩師が専門誌に連載している『巷の図書館探訪記』に掲載されるために「『良心的かつ真摯な図書館であることのアピールにレファレンスコーナーを充実させよう』」(p. 64) と提案するなど，どこまで本気なのかはわからないが，やや極端な性格に描かれている場面も存在する。

○能勢

日野と同期に就職した男性職員で，既婚者である。語り手の文子が淡い好意を感じていることをほのめかしている場面もある[1]。

能勢の「一人娘は」「重症の小児喘息と診断され」「特に夜中は発作が起きやすく」(p. 50) それに対応しているため，昼間のある時間帯，カウンターのはしに「パーティションで遮断した個室を作り」，作業中と称して熟睡している。館長や利用者はそちらに近寄らず，職員は「特殊な事情があるからと，睡魔から逃れられない午後の一時間ほどのこの『作業』を黙認している」もっとも，「この時間彼はすべての電話を取

り，対処する」「やたらに寝覚め」がよく「熟睡していても」次の瞬間には「はきはきとした答えを電話に返」（pp. 10–11）すという。病気の家族への対処という理由ではあるが，こうした職員がカウンターに存在しているという場面は，職員のイメージとして，好ましいものとはいえないだろう。

図書館の施設について「図書館には宿命的について回るものがいくつかある。その一つが埃だ」「弱い気管支を持つ者に，店ざらしの書物六万冊（開架部分のみ）に囲まれた空間は，よい環境とはとてもいえない」（p. 192）とある。さらに「『児童室を埃を払いやすい低書架にしたのも，予算超過してまで床を全面コルク張りに』」（p. 193）したのも能勢が主張したからで「『あれは絶対，お嬢ちゃんのことが頭にあったせい』」だと日野が発言しているのも，娘のことだけでなく，喘息の患者全体のことを考慮した，ということではあっても，やや公私混同気味のところがある。

一方，子どもに対応している場面で，能勢は「『図書館には本しかない。でも本だけはある。お前ら，この中にどれだけの広い世界が詰まっているか，知っているか？　知らないだろう？　だったらまず，知ろうとしろよ。こんなものと片付ける前に，まず，試せよ。試してくれよ。書物の旅をしてみてくれよ』」（p. 49）と，図書館の存在をアピールしている。また，図書館の特徴については「『図書館は開館から閉館までずっといつづけをしても感謝こそされ文句一つ言われない，稀有な場所だからな。おまけに暇つぶしの種にはことかかない』」（p. 65）「ここは図書館だ。誰もが入れる。誰が来ても，そしてどんなに長居をしても不審がられない」（p. 92）と，利用のためのハードルの低さについて発言しており，図書館について，深い理解を背景にもっていることをうかがわせる。

さらに能勢は「『図書館はお人好しなところで，書かれた住所氏名を疑ってはかかりませんからね』」（p. 129）「『市立図書館から個人情報漏洩！　めぼしいネタのない日だったら，新聞が喜んで一面に書きたてるでしょう』」（p. 136）と対外的な図書館のみられかたについても，一定の配慮を考えている。そして，能勢は「『この師走のいそがしい時に，教育委員会のお偉方が議会答弁に必要だからとか言って，またぞろ要領を得ない報告書をご注文だ』」（p. 82）といった仕事もこなしている。

『南方熊楠全集』の購入提案については，最終的には日野に却下されてしまうが，「『これは絶対必要。持ってなきゃ図書館として恥ずかしい。ほら，お買い得』」（p. 105）と，推薦し，文子が『選集』はすでに図書館に入っていると言うと，書簡，未発表の手記まで収録されていることを主張し，文子に「能勢ときたら自分の主義・趣味に買いたがるのだ」（p. 106）と評されている。また，「なみいる世の批評家たちを批評することこそが図書館員のつとめだとうそぶく」（p. 221）と描写されている部分もある。

登録者のリストとみられる紙片が持ち込まれた際には，能勢は「『お客さんの個別の読書傾向なんて，図書館としての事故が起きない限り，おれたちは知る必要もないし，知るべきでもない』」（p. 120）と発言しており，利用者のプライバシーに対する配慮についての見識をもっている。

ある利用者が学校図書館について，「『そういや，放課後だけ開いている，本が詰めこまれた部屋があったかなあ……でもてんで魅力がなかった。古ぼけた本しかないし，ラベルもばらばらでどういう法則で並んでいるのかわからないし，何か調べようにも十何年も前の百科事典しかなくて役に立たないし』」と発言しているのに対して「『かえりみられない図書館の典型だな』能勢が笑う」（p. 211）といっている場面があり，やはり図書館にとって，利用されることの重要性は理解していると思われる。

○館長

「館長は昨年学務課から異動してきた。典型的な事務屋さん」「図書館という別世界に突然放り込まれたこのおじさんは，しかし大の読書好きであり，図書館に所蔵すべき図書を決定する選定会議の間は館長がカウンター番を代わってくれている」「いかなる本を買うべきか買わざるべきか，喧々囂々，つばを飛ばして議論している職員というものは，いつにもまして異星人のように，一種畏れを抱くべき生き物のように見えるらしい」（p. 106）と文子の視点から描写されており，図書館の専門的な知識とは直接かかわりのない行政職の立場ではあっても，図書館の専門職である司書の職員には一目置いており，その専門的な領域についてはあからさまに介入しようとはせず，かなり好意的な存在として描かれている。この小説自体に，根っからの悪人，読者が嫌悪するようなキャラクタの人物はほとんど登場しないのではあるが。

○工藤

能勢が「『事務の工藤さん』」（p. 15）とよんでおり，「事務を担当している工藤」（p. 21）といわれている人物。ただし，登場シーンが少ないので，詳しいキャラクタについてはわからない。

○正規職員以外

この小説の特徴として，市の正規職員以外にも，多様な形態の図書館で働いている人たちが登場している。外から見ている限りでは，その違いがわかりにくいと思われる部分についても，図書館勤務経験のある作家の視点から，くわしい描写がなされているといえよう。

・「文子のほかにカウンター要員は，その日で三日目になるアルバイトの大学生だけ」で，その大学生が「キャリアの差など知らぬ男性利用者」に，当日の『官報』について尋ねられ「コンピュータの書名検索画面に向かい，単語を入力しようとする」のを見て，利用者からの電話に対応していた，女性職員の文子は，「単純な疑問を投げかければ即座に機械が何でも答えてくれると思うのが大変な錯覚であるということを，素人の彼女は知らない」（p. 56）と感じて，あわててそちらに対応しようとするが，他の利用者の男性（図書館学の担当教員を退官した人物）が「インターネット上のサイトで最新の官報はご覧になれますよ。こちらの図書館の方が見せてくださるでしょう」（p. 57）と発言している場面がある。カウンターにもアルバイトの職員が配置されている状況があり，また，カウンターに座っている職員の知識や経験にも多様なものがあることは，外部から見ているだけでは分かりにくい点でもある。そうしたカウンターへの，多様な職員配置の実態とそこから引き起こされる問題状況が，ここではやや滑稽に描かれている。

・「二月末の」「日曜，文子はただ一人の職員として秋葉図書館を守っている」「図書館にいるのは文子とアルバイトの大学生一名だけ」（p. 142）「午前中はもう一人アルバイトの女の子が出勤してきていた」「文子の判断で早退させた」（p. 143）とあり，日曜日には，ローテーションにあたる限られた正規職員しか出勤せず，アルバイトの配置で利用者への対応が行なわれている，現代の図書館事情が反映されている。

・「カウンター番をしてくれているバイトのおばさん」（p. 31）という女性も登場するが，これ以上の記載がないので，この人物の詳細はわからない。

・「館の清掃を受け持っている業者のおばさん」（p. 22）として登場し（ここでは名前は明示されていない），そのストーリー（「第一話　霜降――花薄，光る。」）の後半で，能勢の発言に「『掃除の小野寺さん』」（p. 46）と呼ばれている人物がいる。この女性が，別のストーリー（「第三話　立春――雛支度」）では，より重要なキャラクタとして登場する。「文子ははっとした。いつも『掃除のおばさん』としてしか意識していなかった」（p. 128）というこの人物が，図書館の資料を不正に持ち出していたのである。「『あたしの時給は七百円ですよ。いつだって生活するだけで精一杯』」（p. 132）というこの人物は，一冊三万円の美術書を数十冊，他人名義のカードを使って不正に持ち出している。「『あたしには貸してくれないんですよね。あたしは秋庭の人間じゃないから。あたしは隣町から自転車で通ってますからね』」（p. 132）ということで，図書館に届いた，文化センターと図書館の共催で開催される，講演会申込みの葉書を使って，他人名義のカードを作成し，借出している[2]。「『あの本をあたしのもの，いつもいつもうちであたしを待っていてくれるものにする』」（p. 132）ために，返却する必要のない，不正な手段で持ち出したということになる。

非正規職員とはいえ，図書館に勤めている女性が図書館資料を不正に持ち出すというのは，かなり衝撃的なことである。ただ，派遣職員による，これと類似した現実の事件も存在している[3]。非正規職員の待遇がよくないことや，モチベーションを維持しにくい業務を担当せざるをえない状況も，図書館の職種として実在していることを，実体験をふまえて小説に登場させているといえよう。

3–4. 図書館とストーリー

「第一話　霜降――花薄，光る。」では，図書館閉館後も子どもが居残ろうとして，「図書館内が機械警備に切り替わった瞬間，赤外線センサーにひっかかった」（p. 29）ということで，子どもが図書館内に残っているのがわかってしまう。このような行動は，カニグズバーグ『クローディアの秘密』[1]に触発されたものであることが，紹介される（pp. 40–41）。

「第二話　冬至――銀杏黄葉」では，福祉バスの運行で利用者が増加するが，「館内をそぞろ歩いているのはご老人ばかり」（p. 61）といった時間帯も出現する。そのなかで，「深雪さん」という女性は「六十歳は超えているだろうか」という人だが，「『昔は文学少女だったんですよ。学校図書室の図書係をしていて，将来は司書になりたくて，少しはその勉強もしたんです』」（pp. 62–63）と発言している。この女性が来館した日に，ある本に絵本の表紙をコピーしたものが挟まれていたり，洋書が分類番号とは違った順番に並べられていたり，という事件が起こる。

「第三話　立春――雛支度」では，「図書館のカード番号に，住所氏名電話番号。さらに書名まで書き込ま

れた紙が」（p. 109）コンビニエンスストアのコピー機に置き忘れられていた，という発端からストーリーが展開する。利用登録について「図書館では慣例として，郵政公社を通して届いた郵便物を本人のIDとして認めてきている」（p. 117）また身分を証明できる書類をその時にもっていない場合でも，「当日一回限りということで貸出を認め」（pp. 117–118）ることもある，と説明される。それを悪用して他人名義のカードを作成して本を借り，返却しない，という事件を引き起こしたのは，図書館の非正規職員であった。

「第四話　二月尽――名残の雪」では，大雪が降った日でも「公共機関は休むわけにはいかないのだ」「市の条例で定められている開館時間は，遵守されなければならない」（p. 143）ということだったが，「最終決断者の秋庭市長の決断」（p. 146）で閉館となり，その日は，文子は，近所の秋葉家に泊めてもらい，怪談めいた話を聞かされる。

「第五話　清明――れんげ，咲く。」では，図書館の書架に秋庭図書館の蔵書ではない，古い本が発見される。「糸綴じはゆるみ放題，天地は醤油につけたかと思うほどに赤茶け，小口には何かのしみがたれた跡，おまけに角は擦り切れてクロース装丁の赤い色はすっかり褪色しきっているような一冊の古本」（p. 201）であったが，それは「四十年もの昔，まだ翻訳児童書の出版が格段に少なかった頃，燦然と現れた児童文学全集の一冊」「児童書を置く図書館であれば必ずや所蔵しているというほどの定番，古典扱い」「現代っ子たちには人気がない」（p. 201）とされる『床下の小人たち』であった。「秋葉図書館の蔵書ではない」（p. 202）が，日野が「『学校図書室の本ね』」（p. 202）といったように，すでに廃校になった中学校の本であった。

こうした，図書館の中での，あるいは図書館をとりまくさまざまな状況の中で，事件が起こり，それを，男性職員の能勢を中心とした図書館員が，さまざまに考え，謎が解かれてゆく。

3–5. 現実の状況との対比

図書館に一番近い小学校の三年生が，図書館にやってくることについて，館長が「『秋になると，いろんな小学校から施設見学の依頼が来るからねえ。カリキュラムで決まっているんだろうが』」と発言し，それをうけて「『生活科の総合学習ってやつですね』」（p. 19）という会話をしている場面がある。現行の学習指導要領では，「生活科」は小学校1・2年に開講される科目であり，「総合的な学習の時間」は小学校3年から高等学校で開設されている。したがって，「生活科の総合学習」という言い方には，違和感がある[1]。

また，公共図書館と，学校図書館との貸出方式の違いが，現実の状況と合っていない場面がある。「裏表紙を開けると，黄色いブックポケットが見えた。スタンプで日付がいくつも押してある。今は空のブックポケットに，本来なら本の題名を明記したブックカードが一枚入っていたはずなのだ。誰でもこの本を借りたい者は自分の貸出券を出す。図書室はその券と本から抜いたブックカードを一緒にして，『貸出中の本』のファイルに保管し，ブックポケットには返却期限を押して本を渡す。貸し手には誰がどの本を借りたか明瞭な形で記録が残り，借り手も，本を開けば返却期限が一目瞭然。そして重要なのは，第三者には，本を借りた人間が誰か，たとえ貸出中の本を偶然入手しても決して特定できないことだ」（p. 212）とある。これは，1980年代まで，日本の公共図書館でも多くみられた「ブラウン式」[2]の貸出方式である。しかし，この「一九六〇年初版」の『床下の小人たち』という本は，「秋葉図書館の蔵書ではな」く，「学校図書館の本」（p. 202）だというストーリーなのである。

現実には，学校図書館では，小中学校では，専任の職員が配置されていないこともあって，ブラウン式は，ほとんど採用されなかったと思われる。代本版・ブックカード・個人カード・両者を使う2票式，などの方式が使われてきていた。したがって，過去においては，本を借りた人間が誰なのか，資料が貸出中の間はもちろん，返却されたあとでも「特定できる」ケースが多かった[3]。近年，コンピュータが導入されても，こうした傾向は残っている[4]。

4. 女性図書館員へのまなざし

図書館に勤務経験のある女性作家が描く，女性図書館員のキャラクタは，自らの体験をふまえて書き込まれているといえよう。篠田節子は，市役所に就職したのは必ずしも本意ではなく，図書館以外の部署も体験している。「青春時代から三十代前半にかけてのほぼ十五年間を振り返ると，まさに甘くて安直で，真剣で野心にあふれた時間を送っていた」「二十代後半の冬，流産して数日入院し，職場に戻ってみたら，仕事がなくなっていた」「突然の入院によって仕事に穴を開け，事務量を大幅に減らされて，職場にいってもやることはなくなった。早い話が，給料はもらえるが暇

だった」「もう二十八，これでいいのか？この仕事（公務員）は天職なのか？」「ちょうど職場は図書館だったので，閉架書庫にもぐり込み，暇にあかせて手がかりを探した。ジャーナリスト『千葉敦子』との出会いは，そのときのことだ」「暇をもてあまし，進路を見失い，薄暗い図書館の書庫をさまよいつつ，私は千葉敦子のエッセイを手に取った」という状況にあったことが紹介されている[1]。一方，作家としての現在の立場からは「調べ物の合間に，私は懐かしい思いでカウンターの内を覗きこむ。教育行政と出版文化と商業主義の狭間で，今年はどんな騒動がもちあがっていることだろうか」[2]と述べている。

篠田節子自身は，結婚してはいるが，流産し，仕事の面で迷いをかかえて，売春こそしないが，自らの境遇の将来に対し展望がもてない時期があった。そこから，脱出するためさまざまな対応を試み，ついに小説の出版という方向に活路を見出していくことになる。そうした迷いを抱えていた時期の一部が，図書館に勤務していた時期であり，そのころの思いが「観覧車」の登場人物である女性の発言に投影されている部分があるといえよう。

森谷明子『れんげ野原のまんなかで』では，女性の正規職員とともに，業者から派遣され，掃除を担当している非正規職員がフレームアップされているのが特徴のひとつになっている。若い女性図書館職員の文子は，男性先輩職員へのあわいあこがれなど，恋愛に関しては不器用なキャラクタとして描かれている。まだ図書館に勤めてキャリアが浅いが，図書館の仕事に一定のプライドを持っている。「図書館の自由」「利用者のプライバシー」に関する問題が発生した際の毅然とした反応などにもそれが現れている。資料の選択については，高額な資料の購入に反対しつつ，先輩女性職員の判断には敬意を表している。そして，レファレンスでの利用者への回答とその反応に喜びを見出している。

その女性先輩職員の日野は，「いい本です」という図書推薦の弁に自らの資料に対する判断への自信がうかがえる。しかし，一方では，高額資料の購入を却下したり，利用されてこその図書館という考えも表明されている。ただこうしたイメージのキャラクタによって，図書館員の専門性についての具体的な中身が，読者に深く理解されるようになるかどうかはわからない。

履歴を詐称し，カードを不正に作成して，他人名義の貸し出しカードで，図書館の資料を持ち出すのは「館の清掃を受け持っている業者のおばさん」で「『掃除の小野寺さん』」とよばれていた女性で，文子は「いつも『掃除のおばさん』としてしか意識していなかった」人物である。図書館を不正に利用しようとするキャラクタを，あえて図書館の非正規職員と設定しているのである。実際に勤務していたからこそ，こうした多様な雇用形態の職員が混在している図書館の現場の存在と，そうした状況のもたらす問題点を描くことが可能になったということは指摘できるだろう。

5. おわりに

近年，図書館に勤務経験のある女性が，本を出版するケースがいくつかみられる。書評やエッセイを内容とする，大島真理『無口な本と司書のおしゃべり』[1]，飯田治代『よみからかす　絵本からミステリーまで』[2]，「本が大すきだった校長先生は，小学校をたいしょくすると，図書館の館長さんになりました」という導入部からはじまる，子どもむけの創作童話，若穂由紀子『ようこそ森の図書館へ』[3]などの例がある。

かつて，テレビドラマ『素顔のままで』の図書館や図書館員の描かれ方について検討したが，安田成美が演じた図書館員は，ドラマの後半では絵本作家になっている。「優美子は図書館を辞め，それまでつづけていた絵を本格的に描き始めた」[4]「高田馬場にある出版社のビルの一室で，優美子は目の前のテーブルの上に編集者がうやうやしく置いた一冊の絵本を手に取った」「『嬉しいです。自分の描いたものが，こうして本になるなんて』『社内でもとっても評判がいいんですよ。絵もお話も』『本当ですか？私，文章には自信がなかったんですけど』」「いつか自分の本が，勤めていたあの図書館の書棚に並ぶことがあるだろうか，と頭の隅で考えていた」[5]というストーリーであった（その後は，子どもを出産した際の無理が影響して亡くなってしまう）。

「はじめに」でとりあげたように，総合文芸雑誌が，文芸関係の周辺の職業として図書館を特集している。しかし「はたらきたい」図書館として紹介されているのは，いずれも専門図書館であり，そのイメージこそが，読者が「はたらきたい」図書館だと編集部が考えているのではないかということにふれた。現実の公共図書館の利用者層には，そのイメージの枠の中に入りきらない多様な人たちも存在している。そうした点からみると，女性作家が描く女性図書館員へのまな

ざしは，より意味を持ったものとしてうかびあがってくる。文芸関係の仕事につきたいという希望をもっていたとしても，それが困難な場合，その関連業種の一つである，図書館員はどうか，という読者の思いに対して，実際に図書館勤務経験のある女性作家が描く図書館は，より現実の状況を反映したものになっている。

篠田節子が述べているように，誰もが利用でき，多様な利用者が訪れる公共図書館の職員は肉体労働の部分や，きれいごとでは勤まらない側面をもっている。また，森谷明子の小説に描かれるように，専門的知識やそれを背景にした選択眼，きびしい研修が求められている部分も存在する。正規職員以外の人たちも図書館の業務に係わっており，そのモチベーションには落差が存在していることもある。そうした部分を描き出していることが，図書館員出身の女性作家の描く図書館職員を，現実のものに近づけているひとつの要因となっている。図書館職員の専門性に対する意識や，またそれが図書館の外の社会からどのように受け止められているのか，そうした点が，実際の図書館勤務体験に立脚した形で作品にも表わされている。

篠田節子の作品には，さまざまなかたちで図書館を利用する人物が登場しており，また阿刀田高の膨大な作品群にも，図書館との関係をうかがわせるものが多数含まれている。そうした図書館員出身作家の見解をさらに分析して今後とりあげる予定にしている。

注

1．はじめに

1）「メディアファクトリー」から刊行されている，月刊誌『ダ・ヴィンチ』は，「BOOK REVIEW」「旬の本棚」などの文芸作品紹介記事，作家や批評家などによる連載小説・エッセイなどに加えて，コミックの紹介ページなどもあり，比較的若い年齢層の読者を対象とした総合文芸雑誌といえる。

佐野真一『だれが「本」を殺すのか』プレジデント社，2001，では『ダ・ヴィンチ』編集部を取材し，「公称部数は三十万部。読者層の男女比は，六対四で女性が多く，平均年齢は二十六～二十七歳で，読者の四分の一は大学生によって占められている」（pp. 360–361）としている。また，当時の同誌発行人である長薗安治は「新聞を読まない読者層をターゲットにするというのは最初からの傾向ですね」（p. 361）と述べている。

斉藤美奈子『誤読日記』朝日新聞社，2005，では「『ダ・ヴィンチ』は10代～20代を対象にした書評誌だ。この世代には本もゲームもケータイも等価のメディア。それらと競合するためには，誌面のゲーム化，ごっこ化も避けられず，そこを否定したら本に未来はないだろう」（p. 181）とされている。

2）「特集好きな本に囲まれて仕事したい！　図書館ではたらく。」『ダ・ヴィンチ』2005. 8, pp. 197–203
個々の記事の内容は，次の通り。
「図書館の仕事って？　hanae*ちゃんが一日図書館員。」pp. 197–199
「本に囲まれてはたらく人たち」pp. 200–201
「こんなところではたらきたい！　気持ちのいい図書館・ブックカフェガイド」p. 202
「本好きのためのハローワーク　図書館員になる　書店員になる　本屋さんをひらく　古本屋さんをひらく」p. 203

3）森　智彦『司書・司書教諭になるには』ぺりかん社，2002

4）常世田良『浦安図書館にできること－図書館アイデンティティ』勁草書房，2003

5）鎧水三千男，中沢孝之，津森康之介『図書館が危ない！　運営編』エルアイユー，2005，では「館内での迷惑行為」「不審な人物の来館」「粗暴な利用者」などをはじめとして，具体的な事例が紹介されている。

2.「観覧車」（『秋の花火』収録）

2–1．篠田節子と「観覧車」について

1）篠田節子の略歴については，各著書の「著者紹介」によると，1955年東京都八王子市生まれ。東京学芸大学卒業後，八王子市役所に勤務するかたわら，創作活動を開始し，『絹の変容』集英社，1991（初出誌『小説すばる』1990. 12）で，1990年度「第3回小説すばる新人賞」を受賞した。その「2ヶ月後，13年間勤めた八王子市役所を退職」（出典：篠田節子『ハルモニア』1991，マガジンハウス，の奥付）して作家専業に，という経過をたどっている。

その後『ゴサインタン』双葉社，1996，で，1996年度「第10回山本周五郎賞」を受賞，『女たちのジハード』集英社，1997，で，1997年度上半期「第117回直木賞」を受賞している。

2）ビデオソフト『作家ほっとタイム　現代作家インタビュー集　篠田節子』丸善，2000. 7：1998. 4. 21収録

3）篠田節子「図書館随想」『三日やったらやめられない』幻冬舎，1998, pp. 128–133
巻末の「初出一覧」によると，初出は「推理作家協会会報」1992. 12

4）「小ずば新人賞特集　スペシャル対談　宮部みゆき×篠田節子　志高き者よ，新人賞の門をたたけ！」『小説すばる』2005. 12, p. 21

5）篠田節子「レオノール・フィニのいた街」『寄り道ビアホール』朝日新聞社，1999, pp. 150–155
巻末の「初出」によると，初出は『銀座百点』1999. 7

6）篠田節子「反運命論－運命の変わるとき，との課題を与えられて－」『三日やったらやめられない』幻冬舎，1998, pp. 236–239
巻末の「初出一覧」によると，初出は，『小説すばる』1998. 1

7）篠田節子「ルーティンワークから見えてくるもの」『寄り道ビアホール』朝日新聞社，1999, pp. 179–183

巻末の「初出」によると，初出は『日経ウーマン』1998. 11

8）「宮崎緑の斬り込みトーク No. 191　書きたいものしか書かないわがままな作家なんです　篠田節子さん　作家」『週刊読売』2000. 2. 27, pp. 130–134

9）「ほんのインタビュー　篠田節子さん」『サンケイスポーツ』2000. 1. 30, p. 22

「小すば新人賞特集　スペシャル対談　宮部みゆき×篠田節子　志高き者よ，新人賞の門をたたけ！」『小説すばる』2005. 12, pp. 13–27, では「篠田　私は『でもしか』で小説教室行っちゃって，それで，同じ教室の奥様が『あなた，才能あるわよー。絶対いけるわ』と」(p. 18)「篠田　私が初めて講談社のフェーマススクール・エンターテイメント小説教室に行ったのが平成元年」(中略)「篠田　私，その頃，宮部さんのことは聞いていたんですよ。カルチャーセンターの多岐川教室にいたから」「宮部　あっ，そうだよね。多岐川先生の教室からフェーマスに来たんだもんね」(p. 17) と述べられている。

10)「図書館はどうみられてきたか」というタイトルでの，継続的研究の一環として，発表を予定している。

11）篠田節子「観覧車」『秋の花火』文藝春秋，2004, pp. 7–65

巻末の「初出誌」によると，初出は『小説推理』1997. 8

2–2. 女性図書館員の外見的所見

1）この「梅沢」については，作品の冒頭で，「動作からすると四十も半ばのように見えるが，色白の顔は不釣合いに若い」(p. 7)「市議会議長の息子で，建材業を営む実家が市内でも有数の金持ち」(p. 9)「何度か断られたために見合いにも及び腰になっている」(p. 10) と紹介されている。

2–3. 女性図書館員の性格・行動分析

1）「宮崎緑の斬り込みトーク No. 191　書きたいものしか書かないわがままな作家なんです　篠田節子さん　作家」『週刊読売』2000. 2. 27, pp. 130–134

2）篠田節子「反運命論－運命の変わるとき，との課題を与えられて－」『三日やったらやめられない』幻冬舎，1998, pp. 236–239

2–4. 職業としての図書館員と「東電 OL 事件」への意識

1）「観覧車」は，分量的には，1ページ約750字で60ページ程度。全体として，400字詰め原稿用紙にして，100枚あまりの作品である。

2）佐野真一『東電 OL 殺人事件』新潮社，2000

3）中村うさぎ「連合赤軍事件と私」『穴があったら落っこちたい！』角川書店（文庫），2003, p. 123

4）中村うさぎ「東電 OL 事件と私」『穴があったら落っこちたい！』角川書店（文庫），2003, p. 169

5）桐野夏生『グロテスク』文藝春秋，2003

初出は，巻末に「『週刊文春』2001年2月1日号～2002年9月12日号」と表示されている。

週刊誌に約一年半にわたって連載され，単行本は，1ページに2段組で約1,000字，500ページ以上ある，厚さが5センチ以上の分厚いものである。

なお，「参考文献」には，「『東電 OL 殺人事件』佐野真一　新潮社」他3点があげられている。

女性の学歴は，「Q 学園」の「女子高等学校」に，「高校から入学試験に合格して入学」(p. 59) し，その後「Q 大学経済学部」に進んで卒業後，「G 建設会社」に就職。高校では，「生徒間の差別」があり，「内部からの生徒と外部からの生徒の差は一目瞭然」で「制服のスカートの丈の違い」(p. 61) にそれが現れていた，という設定になっている。これは実際の事件の被害者となった女性が，「地元の中学校を経て慶応女子高校から慶応大学経済学部に進んだ」(佐野真一『東電 OL 殺人事件』新潮社，2000, p. 78) 事実を意識しているものと思われる。

6）この事件は1997年3月に起こっているが，「観覧車」が，掲載されたのは『小説推理』1997年8月号であり，事件の表面化直後に執筆されたものと思われる。ただ，「観覧車」が収録されている『秋の花火』(文藝春秋) が単行本として刊行されたのは，2004年7月である。

7）「ほんのインタビュー　篠田節子さん」『サンケイスポーツ』2000. 1. 30, p. 22

3.『れんげ野原のまんなかで』

3–1. 森谷明子と『れんげ野原のまんなかで』について

1）森谷明子『れんげ野原のまんなかで』東京創元社，2005. 2

2）アーロン・エルキンズによるこのシリーズは，『偽りの名画』『一瞬の光』『画商の罠』が翻訳され，刊行されている。

アローン・エルキンズ著，秋津知子訳『偽りの名画』早川書房，1991

「訳者あとがき」(pp. 381–383) で紹介されているインタビューで，作者：アローン・エルキンズは「自分の書くミステリはまず第一に肩のこらないエンターテインメントであること，そして，もう一つ心がけていることは，自分の好きなディック・フランシスの作品のように，読みおわったとき，知らぬ間にある特定の分野について物知りになっているようなミステリを書くことだ」と語っている。

アローン・エルキンズ著，秋津知子訳『一瞬の光』早川書房，1993

アローン・エルキンズ著，秋津知子訳『画商の罠』早川書房，1995

「訳者あとがき」(pp. 359–362) では「シアトル美術館の“らしくない”学芸員クリスは，ふつうの人という言葉がぴったりの感じのいいナイスガイ。仕事柄，海外出張の多い彼は，第一作『偽りの名画』ではベルリンで，第二作『一瞬の光』ではイタリアのボローニャで事件に巻き込まれたのでしたが，今回はフランスのディジョンで難問に取り組む羽目になります」と紹介されている。

3）「ブックトーク　森谷明子『れんげ野原のまんなか

で』 図書館を舞台にした“日常の謎”派の秀作」『オール讀物』2005. 4, p. 353

4）「ブックトーク　森谷明子『れんげ野原のまんなかで』 図書館を舞台にした“日常の謎”派の秀作」『オール讀物』2005. 4, p. 353

5）吉田伸子「新刊めったくたガイド　三浦しおん『むかしのはなし』のモモちゃんに惚れた！」『本の雑誌』2005. 5, pp. 42–43

6）「図書館コラム　9　感銘を受けた図書館が舞台の本」『京図ものがたり』vol. 10, 2005. 8, pp. 6–7　なお，この記事の「責任表示」は明記されていない。

『京図ものがたり』は，同誌 p. 8，の『編集後記』によると，「その名が示すとおり，『京』の『図』書館情報をお伝えし，少しでも市民の皆さんに親しんでいただけるよう」「平成14年4月」に創刊されたもの。

7）「ブックトーク　森谷明子『れんげ野原のまんなかで』 図書館を舞台にした“日常の謎”派の秀作」『オール讀物』2005. 4, p. 353

8）森谷明子『千年の黙（しじま）異本源氏物語』東京創元社，2003

9）「ブックトーク　森谷明子『れんげ野原のまんなかで』図書館を舞台にした“日常の謎”派の秀作」『オール讀物』2005. 4, p. 353

3–2. 図書館の情景描写

1）森谷明子が現実に勤務していた横浜市図書館は，9時30分開館であり，中央図書館は20時30分まで，そのほかの地域図書館は19時まで開館している。

3–3. 図書館の職員

1）大雪で交通機関が止まって，図書館も閉館となった日，能勢は文子に，図書館に近い自分の家に泊まることをすすめる。しかし文子は「どうしても能勢さんの家に行きたくないと思っていた」「自分の家にいる能勢さんを，図書館ではないほかの場所にいる能勢さんをみるのが，いやだったんだ」「図書館ではないほかの場所では，能勢さんの隣にはほかの人がいるからだ……能勢さんの奥さんが」（pp. 180–181）という場面がある。また，図書館にあらわれた能勢の夫人と娘をみて「(……負けてるな)」「すなおにそんな言葉が，心のどこかから泡のように浮かんできた。あたしはあの夫人にはかなわない」「とうとう会っちゃった。会いたくなかったのに」（pp. 199–200）と，文子は感じている。

2）最近では，多くの図書館で，「市内に居住」または「市内に通勤・通学」のいずれかをみたしていることをカード発行の条件にしており，この図書館で仕事をしているということで，カードが作れなかったのか，という点が疑問ではある。あるいは，「業者のおばさん」ということで，「業者」の登記されている所在地が，市内ではなかったということか。

3）2002年に，江東区立図書館で，派遣職員が，CDのリクエストに関して，個人情報を不正に利用した事件があった。

「江東区立図書館　業務委託先企業のパート社員が個人情報を私的利用CDを借りたいと偽名督促　区は厳重注意と再発防止策の提出求める　区職労は『直営に戻せ』」『都政新報』2002. 12. 17, p. 2

3–4. 図書館でのストーリー

1）E. L. カニグズバーグ作，松永ふみ子訳『クローディアの秘密』岩波書店，1975

（ここでは，2000年に刊行された，同タイトルの「岩波少年文庫」版，を参照した）

裏表紙には「少女クローディアは，弟をさそって家出をします。ゆくさきはニューヨークのメトロポリタン美術館」とある。

ストーリーの中では「ルネサンスとミケランジェロのことを」「四十二番通りの大きな図書館で」調べるシーンがある（p. 96）。「図書館につくと，ふたりは受付にすわっていた女の人に，ミケランジェロに関する本はどこにあるのかききました。女の人は最初，ふたりに児童室を教えたのですが，児童室の司書はふたりが何を知りたいのかをきいて，五十三番通りのドンネル分室を教えてくれました」（p. 97）「一階の美術室で，司書が，クローディアが図書カードで選んできた本をさがす手つだいをしてくれました。司書はふたりのところへ別の本も何冊かもってきてくれました。これはクローディアの気にいりました。クローディアはいつでも，サービスしてもらうのがすきですからね」（p. 98）とある。

「四十二番通りの大きな図書館」は，現在「Humanities and Social Sciences」となっている。「五十三番通り」にある「Donnell Library Center」は「The Central Children's Room features non–fiction and reference books for children on all topics」とされている。

出典は，「ニューヨーク公共図書館」のホームページ（http : //www.nypl.org/）

2）メアリ・ノートンの『床下の小人たち』は，1952年に英国で出版された。日本では，1960年代に林容吉の訳により，岩波書店から刊行され，その後も新訂版が刊行されてきている。

3–5. 現実の状況との対比

1）文部科学省のホームページ（http : //www.mext.go.jp/）で公開されている，現行の学習指導要領で，「生活科」については「小学校学習指導要領（平成10年12月）」の「第5節　生活」は「第2　各学年の目標及び内容」について「〔第1学年及び第2学年〕」で実施される設定になっている。「(参考)」として示されている「学校教育法施行規則別表第1　各教科等の授業時数（第24条の2関係）」の表では，「生活」は，「第1学年　102」「第2学年　105」であるのに対して，「総合的な学習の時間の授業時数」は「第3学年　105」「第4学年　105」「第5学年　110」「第6学年　110」となっている（ここでの1単位時間は45分）。「生活」は，小学校1年・2年で，「総合的な学習の時間」は，3年以上の学年で実施される科目と位置づけられていることがわかる。

同様に「中学校学習指導要領（平成10年12月）」では「総合的な学習の時間の授業時数」は「第1学年　70～100」「第2学年　70～105」「第3学年　70～130」となっている（ここでの1単位時間は50分）。また，「高

等学校学習指導要領（平成11年3月）」では，「附則」の部分で，「〔参考〕」として「標準時間数」について「総合的な学習の時間」は「卒業までに105ないし210単位時間配当。これに付与できる単位数3ないし6」と記されている。

2）『図書館ハンドブック　第4版』日本図書館協会，1977, p. 329，では「1970年（昭和45）頃から中小公共図書館を中心に急速に普及しはじめ，現在では公共図書館のかなりな部分がこの方式か，この方式の変型を採用しているといっていい」と記述されている。

3）たとえば，21世紀になって刊行された，黒澤浩　編・著『新学校図書館入門　子どもと教師の学びをささえる』草土文化，2001, pp. 173–174，では「学校図書館は公立図書館と異なり，学校教育の目的に沿い，特定の利用者を対象に運営するので，貸し出し方法も目的に応じ工夫します」として「個人カードとブックカードの2票式貸し出し手続き方法」を提案している。

4）この件に関しては，下記の論文で扱った。

佐藤毅彦「『学習の場』としての図書館はどうみられてきたか　学校図書館と『耳をすませば』をめぐる論議の再考とその周辺」『生涯学習時代における学校図書館パワー　渡辺信一先生古稀記念論文集』渡辺信一先生古稀記念論文集刊行会，2005, pp. 97–117

4．女性図書館員へのまなざし

1）篠田節子「長い長いあとがき　反省をこめて，たまにはしらふで」『寄り道ビアホール』朝日新聞社，1999, pp. 223–228

2）篠田節子「図書館随想」『三日やったらやめられない』幻冬舎，1998, pp. 128–133

5．おわりに

1）大島真理『無口な本と司書のおしゃべり』郵研社，2004

同書巻末では「1948年宮城県生まれ。東北大学附属図書館を経て，現在，東北福祉大学講師／図書館司書」と紹介されている。

「あとがき」pp. 130–131では，「司書や本に関する雑多のことがらを書き綴りました」「書評は」「職業柄心に残る本を多くの人に読んでもらいたい思いがいつもあって取り上げたものです」「この本が司書を理解する一助になればと思います」と述べられている。

2）飯田治代『よみからかす　絵本からミステリーまで』ゆいぽおと，2005

同書巻末の「著者紹介」では「一九六八年に名古屋市図書館司書としてのキャリアをスタート。一九八四年ごろから，子育て中の母親たちと児童文学を読む会を主宰。子どもたちが成人しても，仲間たちとともに児童文学を読み続け現在に至る」とされている。

同書は，雑誌『図書館の学校』誌上で「地域誌や新聞などに書かれた書評と，本に関するエッセイを，まとめたもの」（『図書館の学校』no. 66, 2005. 8/9, p. 49）と紹介されている。

3）若穂由紀子『ようこそ森の図書館へ』新風舎，2005

同書巻末の「著者略歴」では「1943年長野県生まれ。元長野県職員，県立図書館勤務」とされている。

4）北川悦吏子・原作，島崎ふみ・文『素顔のままで』フジテレビ出版，p. 216

5）北川悦吏子・原作，島崎ふみ・文『素顔のままで』フジテレビ出版，pp. 218–219